



No.1	2/17-18	2DAY	Chiba Stage	200km
No.2	6/11	1DAY	Karuizawa Stage	150km
No.3	9/10	1DAY	Matsumoto Stage	150km
No.4	10/29	1DAY	Saitama Stage	150km

NASC Classic Car Rally Series 2006

日本初のクラシックカーラリーシリーズ戦 懐かしのクルマと、 旧き良きラリーを

クラシックカーによる日本初のラリーシリーズがスタートした
開幕戦はニホン・オートモービル・カレッジ(NATS)を中心に行なわれ
思い思いの愛車でエントリーした26台がラリーを楽しんだ

Text & Photos/Shoji Mita

クラシックカーによる日本初のラリーシリーズと銘打ったラリーの記念すべき開幕戦が、2月の17、18日の2日間にわたり、千葉県から茨城県を舞台に開催された。古くは1924年式のベントレーから、最新では1973年式のボルシェ911まで、今回は26台がスタート場所となる大栄町のNATSサーキットに集まった。

クラシックカーというと、高価な外車ばかりという印象を受けてしまうが、なかにはトヨタ2000GTや、サファリ仕様をまとったタットサンP510などの国産車もある。73年式までのスポーティーな国産車も可となれば、出場車種のバラエティも豊かになるだろう。このラリー、実はWRCやJRC



ブルーバードと双瞳をなすラリーカーが、ターマックラリーで活躍したアルビーヌ・ルノーA110で、1.6ℓのOHVエンジンをリヤに搭載する。堀、吉川選手のヘルメットが大きく見えるほど車体は小さい。



シリーズ開幕戦で幸先良く初優勝を飾った延原靖選手のMGA。ナビゲーターの元香かおり選手との2日間のコンビネーションが功を奏した格好だ。

エントリーリスト

ゼッケン	ドライバー	コ・ドライバー	車名	年式
1	並木章二	並木由美子	MG LMGUNA	1933
2	大矢義夫	大矢広子	メルセデスベンツ190SLR	1957
3	千葉泰常	千葉泰基	ベントレーSPORT	1924
4	稲川淳一	松居博子	モーガンPLAS 8	1969
5	関口 忠	関口礼子	BMW328 1937	
6	小林光則	小林麻紀子		
7	佐藤公夫	佐藤喜美子	アルファロメオジュリエッタ	1956
8	宇井孝廣	宇井幸子	ボルシェ356	1957
9	延原 靖	元香かおり	MGA MARK1	1959
10	和泉孝弥	上田哲也	フィアット850スパイダー	1966
11	斉藤和寛	真田美子	ボルシェ356BS90	1962
12	久富 浩	久富邦子	ボルシェ911E	1973
13	森田 隆	高平高輝	ボルシェ356スピードスターGT	1957
14	栗原健彦	上野山聖基	CISITALIA110B	1948
15	青山 茂	青山実男	スピードウエルGTスプライト	1960
16	隅田 修	隅田朝子	ボルシェ356SC	1964
17	角貝一行	角貝ひさえ	ジャガーXK120M	1954
18	谷紀一郎	谷 晶子	ボルシェ911T	1973
19	堀主知口バート	吉川登	アルビーヌ・ルノーA110	1970
20	岩崎一貴	作田 克	トヨタ2000GT	1967
21	清水 久			
22	柴田勝彦	西口康司	アルファロメオスパイダー	1968
23	平野善正	貝塚吉貴	ダットサンP510	1971
24	荒木俊孝	荒木夕香	ボルシェカラ356	1964
25	大森 豊	青木文二	メルセデス300SLC	1957
26	雨宮正信	中島啓介	フェアレディSR311	1969
27	佐藤 愛	山澤タダシ	ボルシェ356	1957



往年のラリー好き、平野善正選手が持ち込んだのは日産にサファリ初優勝をもたらした70年のハーマン車仕様。今回のラリーでは見事3位につけた。



あの007のジェームス・ボンドがドライブし有名になったトヨタ2000GT。今回のラリーでは岩崎一貴選手のドライブする左ハンドル仕様が登場した。

チャリティーラリーイベントも開催 『Caro Gran Sport R.C.』

ロータリー・インターナショナル・モータースポーツ協議会が主催する『Caro Gran Sport R.C.2006』が3月11～12日に開催された。これは、昨年、アメリカを襲ったハリケーンの被害を受けたニューオーリンズ救済支援に、運営費の一部をチャリティーとするクラシックカーラリーイベントで、1972年までに製造されたベントレー、フィアット、マセラッティなど110台が集結。お台場フジテレビ前からスタートし、2日間で約600kmを走った。



1924年製と1939年製のベントレーで出場したタイサンの千葉泰常監督と愛娘の美苗さん、泰基さん、レーシングドライバー飯田章選手。

当日は、クラシックカーラリーの先導車として、バイパークラブの面々も参加。学校内のコースを走行後、NATSを後にするバイパー。



Cのようにスペシャルステージ(SS)で火花を散らすというのではなく、与えられた指示速度のなかでその正確さを競う昔ながらの計算ラリーといった内容だ。とは言っても区切りとなる各チェックポイント(CP)の早着、遅着(正解時間に対して)を1000分の1秒で表示し、その競技性を高めてはある。

ラリーというからにはドライバーとともに、当然ながら地図見と計算担当のナビゲーターは必須。しかし、そこはクラシックカーラリーで、夫婦や気の知れた友人同士など熟年コンビも多い。このパドックから、古いクルマをガレージにしまい込むことなく、それを操って楽しむという成熟したクルマ社会の一端を垣間見ることができた。

ラリーは、初日にNATSサーキットでSS風の走行を楽しんだ後、翌2日目には大栄町から鉾田町、そして土

初回となる今回はウインドウに受ける風はまだ冷たいが、長野や埼玉県に舞台を移す2回目(6月)以降は、きつと爽やかな風が包み込むことになるだろう。

こうして成田市のホテルに次々とゴールし、クラシックカーラリーならではの基準によって採点が行なわれた。つまり年式によって、次のようなハンデが与えられるのだ。39年までのクラス1が+30%、49年までのクラス2が20%、59年までのクラス3が5%、そして60～73年までのクラス4が0%という具合だ。結果、59年式のMGAを駆った延原靖氏が、2日間を好調にこなして初優勝を飾った。また24年式のベントレーで挑戦したタイサンの千葉泰常監督は惜しくも18位に終わったが、「年間4戦という日本初のクラシックカーラリーとして、身近に出場できるイベントができましたね。また国産車ファンにも新たな登竜門となるでしょう。サーキットランを含めてモータースポーツをエンジョイできるという意味でも、是非もう一度千葉で開催してほしいですね。幅広く皆にこのラリーを理解してもらえらという意味でもね」とコメント。2日間のラリーを存分に楽しんだようだった。

1924年の第2回ル・マン優勝車両のベントレーを駆って、ラリーをするタイサンの千葉泰常監督。コーナーは急遽出場できなかった飯田章さんに子息の泰基さんが務めた。

